

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中近世スペインにおける聖ヤコブ崇敬の連続性 :
民衆の「祈り」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2515

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



論文内容の要旨

学位申請者氏名 赤嶺 恭子

本稿の目的は中世と近世における聖ヤコブ崇敬の連続性を探ることである。聖ヤコブに詣でる巡礼すなわちサンティアゴ巡礼は、中世において人や文化が行き交う中心的巡礼であり、ヨーロッパにおけるキリスト教的世界観の構築に寄与した巡礼であった。よってヨーロッパのアイデンティティを培った聖ヤコブ崇敬またサンティアゴ巡礼については関心が高く、民俗学、歴史学、観光学などの様々な学問的アプローチによる研究がなされている。しかし一方で近世に関しては研究される点はまだ多く残されている。バスケス・デ・パルガなど研究者の多くは近世以降、巡礼者が減少し続けたと考え、これが通説となっている。これを裏付ける根拠の1つとされるのが、16世紀末から17世紀にかけて起こった3つの論争である。これらの論争では、それまで事実として認識されてきた聖ヤコブ伝承に対して、その真偽が問われた。またサンティアゴ巡礼への関心の低下を示すものとして、17世紀の聖母崇敬の興隆が挙げられることもある。近世では中世のような遠距離巡礼があまり行われず、近くの聖母の巡礼地へ行く近距離巡礼が盛んに行われていたと言われている。スペインで近世に興隆した聖母巡礼は「柱の聖母」と「グアダルupesの聖母」であり、聖人から聖母へ人々の関心が移っていったことを示していると考えられている。特に柱の聖母は聖ヤコブに入れ替わる崇敬の対象として見なされている。このように近世の聖ヤコブ崇敬やサンティアゴ巡礼に関する歴史的事象は、崇敬心の薄れや巡礼への関心の低下として捉えられている。

しかしながら近年のサンティアゴ巡礼への関心の高まりと共に、スペイン各地でサンティアゴ巡礼に関する研究が進み、これまでの通説とは異なる意見も見られるようになってきた。たとえばアグスティン・ウビエトは、アラゴンにおけるサンティアゴ巡礼者数は中世と近世で大差がないと述べている。そしてバスケス・デ・パルガとの研究結果の相違は、中世と近世におけるサンティアゴ巡礼路の違いによるとする。中世では一般的にフランス人の道と呼ばれるピレネー山脈を越えてスペインに入る道が使われていたが、近世ではカタルーニャの道と呼ばれる海岸沿いの道が主に使用されていたとされる。中世と近世の巡礼者が異なる道を用いたのであれば、中世と同様の検証方法を近世に当てはめると誤差が生じる可能性がある。

ウビエトは中世と近世で異なる巡礼路が使用されていた理由を、戦争、飢餓、害虫、伝染病、自然災害などとしているが、これらは中世末期から近世に起こった小氷期を特徴づけるものである。歴史的出来事と気候の結びつきはル＝ロア＝ラデュリ以降、その因果関係は注目されながらも、安易に気候に結びつけることは単純すぎるとかつては考えられていた。だが近年、自然科学が目覚ましい進歩を遂げ年輪測定やアイスコアなどをもとに過去の気候が1年単位で詳しくデータ化されたことにより、気候変動が社会構造に与えた影響についての研究が行われるようになってきた。その中には、一般的には三十年戦争が引き金になったと認識されている17世紀の危機が、小氷期に起因した出来事であったとするチャンのような意見も見られる。小氷期の中でも16世紀末から17世紀は最も気候変動が激しく、寒冷化が進んだ時期であった。そしてこの時期は、聖ヤコブに関する論争及び柱の聖母崇敬の興隆の時期と重なる。よって小氷期に起こった異常気象と、17世紀の論争と柱の聖母崇敬を照らし合わせることによって、これまでの先行研究では探れなかった近世の聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼の新たな側面が明らかになるのではないかと考えた。本稿では中世から近世に時代が移行しても、人々、特に民衆が聖ヤコブに対して執り成しを願う崇敬心は変わらず、中世と近世で人々の心性が変化したように見えるのは、小氷期の影響により崇敬や巡礼の形態が変移した結果であることを明らかにすることを試みた。

本稿ではまず第1章において、聖人崇敬が何を目的に行われたものなのかを知るために、聖人崇敬の成り立ちを振り返った。聖人崇敬とは、本来は迫害期に処刑された殉教者を聖人として捉え、その聖人への崇敬を行うものであった。聖人崇敬が始まった2世紀は、殉教者の命日に信徒が墓所に集まり、魂の救済を求める執り成しを聖人に願っていた。しかし4世紀のミラノ勅令でキリスト教がローマ帝国で公認されると、キリスト教の発展にともない殉教者以外の聖人も増え、各々の聖人には伝承が付加されるようになった。やがて民衆によって聖人は「病気治癒」など奇跡をもたらすものとして理解されるようになった。なぜなら病は神罰として捉えられていたからである。そして、その聖人に纏わる聖遺物に対する崇敬が盛んになり、巡礼も行われるようになった。聖アウグスティヌスや聖イシドーロスなどは聖遺物崇敬を擁護する立場であったものの、民衆による本来のキリスト教的解釈から離れた聖遺物崇敬に対して危惧していた。しかし教会にとっても巡礼者の増加は教会の豊かさを示すことになるため、民衆の求める聖遺物の獲得を重視するようになった。このように聖遺物の重要度が増し、9世紀になる頃には聖遺物を求めて活発な取引も行われるようになった。このことから聖人崇敬、そしてそれに付随する聖遺物崇敬や巡礼とは、キリスト教的解釈が施されながらも、民衆の信心の影響を強く受けて発展したものであると考えることができる。

第2章では、聖ヤコブとヨーロッパがどのように結びつき、その後崇敬が広がったのか、またサントリアゴ巡礼がどのように発展したかを、災害史も参考にしながら、中世における聖ヤコブに対する執り成しの目的を見た。アストゥリアス王国のベアト・デ・リエバナによって書かれたとされる8世紀の「マウレガートの讃歌」には、聖ヤコブが「病気治癒」と「悪魔祓い」に効験のあるスペインの守護聖人であることが述べられている。この背景には、中世初期の気候最悪期の終盤における天候悪化を引き金に、ペストによるパンデミックの発生と社会不安の増大があったと推測できる。つまりガリシア地域で初期キリスト教時代から崇敬されていたと言われる聖ヤコブを、スペインの守護聖人として讃えることで、国家全体に「病気治癒」と「悪魔祓い」の癒しの奇跡をもたらすことを望んだと考えられる。その後9世紀に、コンポステーラにおいて聖ヤコブの遺骸が収められた墓所が発見され、これにより聖ヤコブをスペインの守護聖人とする重要な根拠が得られた。聖ヤコブの遺骸が発見された経緯については文献上では詳らかではないが、当時の人々にとっては、これは神からの贈り物として捉えられていた。そして、この遺骸発見を契機に、パレスチナで斬首された聖ヤコブがヨーロッパとの結びつきを強く持つ聖人へと変化していく。

中世中期の温暖期になると、気候が安定し、ペストなどの疫病のパンデミックも頻繁に起こらなくなる。これにより「マウレガートの讃歌」で述べられるような「病気治癒」や「悪魔祓い」よりも、巡礼や戦いにおける「危難回避」の加護が求められるようになった。この変化は聖ヤコブのイメージ像にも反映される。巡礼中の危難回避の加護に対しては「巡礼者聖ヤコブ」、合戦中には「マタモロス」となり、この2つが代表的なイメージ像として定着するようになった。このように聖ヤコブとは、各時代の人々の求めに応じて効験が変化していく、極めて柔軟な聖人であると言える。この柔軟な聖人像によって聖ヤコブは中世において、地域色の強い聖人から広くヨーロッパ世界で崇敬の対象となる聖人になったと考えられる。

第3章では本稿の主たる論点となる小氷期に起こった疫病・天候異常と聖ヤコブ崇敬との関連性に着目し、その上で3つの論争を再検討した。3つの論争とは、16世紀末から17世紀にかけて起こったもので、第1の論争が聖ヤコブ祈念課税、第2の論争がスペインでの布教活動、第3の論争がスペインの守護聖人に纏わるものである。この3つの論争には、聖ヤコブへの崇敬の念が低下したことが反映されていると言われている。しかしながら異常気象、自然災害、疫病の蔓延などが頻

繁に見られた小氷期から3つの論争を見ると、聖ヤコブ伝承の伝統に対する批判を契機として起こったものとは考えにくい。

まず第1の論争では、民衆が歴史的事実ではないマタモロスを起源とする記念課税の徴収に反発したことにより、マタモロスの伝承に関する真偽が問われた。これは近世における人々の心性の変化を物語るものとも捉えられている。気候学上では、その時期には小氷期の気候変動によって、たとえば温暖な地中海沿岸地域やバレアレス諸島においても降雪があったり、エブロ川が氷結したり、アストゥリアス地方では天候悪化により収穫量が減少していたとされる。それにより飢餓や飢饉がスペインで発生する。こうした事象を踏まえると、民衆たちは中世の伝説に疑念を抱き、聖ヤコブへの崇敬を批判したのではなく、自らの食料確保も困難であるにも関わらず現物税として聖ヤコブ祈念課税を徴収されることに対して国家に反発したと考えられる。

第3の論争では使徒時代の聖人で西アジア出身の聖ヤコブよりも近世のスペイン出身の聖女テレサの方が、近世の問題を解決するために守護聖人として相応しいとして議論が提起された。これを受けて実際に聖女テレサはその後スペインの守護聖人になる。一見すると古い聖人から新しい聖人への刷新を検討した論争のように見える。しかしながら、この守護聖人を巡る争いで注目すべきは、聖女テレサと共にもう1人、同時代の問題の解決が望めるとして名前の挙げた聖人がいたことである。それが聖ミカエルである。聖ミカエルは、マタモロスのイメージ像と重なるため、「危険回避」の執り成しを行うことのできる聖人として考えられていた。それに加えて聖ミカエルには旱魃を回復させる効験があるとされた。つまり天候回復を望める聖人として名が挙げた可能性がある。この時期は寒波と熱波が繰り返し到来し、スペインでは寒冷化の特徴とされる乾燥が深刻化して、相次いで旱魃や蝗害が起こった。病と同様に、異常気象もまた神罰として捉えられていた。よって第3の論争は、守護聖人の刷新を模索していたのではなく、「天候回復」という差し迫った問題の解決が可能な守護聖人を求めるものであったと考えられる。このことは論争を経て聖女テレサが2度も守護聖人になったにも関わらず、聖ミカエルの名が挙がるや否や守護聖人としての地位を後退させていることから分かる。

ただし第2の論争だけは、第1と第3とは少し主旨が異なる。論争の発端はイタリアで出版された書に、聖ヤコブの布教活動は事実ではないため「使徒たちの祈祷書」から、その記述の削除を求めたとするトレドの大司教ロアイサの発言が引用されていたことであった。これにより聖ヤコブの布教活動の伝説も揺るがされることになる。だが、これは首座大司教座を巡るコンポステーラとトレドとの中世から続く争いであったと推測できる。そして権力闘争であったこの第2の論争を除くと、第1と第3の論争は小氷期という時代が抱える社会不安から起こったものとして捉えることができる。そのため、この3つの論争をもって、聖ヤコブ崇敬の後退が示されたものとして判断することはできないと考えられる。

最後に第4章では、小氷期における近世のサンティアゴ巡礼の変化と柱の聖母との繋がりを中心に扱った。そして近世の人々の願いである「病気治癒」と「天候回復」がどのようにサンティアゴ巡礼で求められたのかを探った。柱の聖母とは中世の聖ヤコブ伝承に登場する聖母の呼び名であり、聖ヤコブがサラゴサで布教活動をした際に現れた被昇天前の聖母のことを指す。しかし聖ヤコブ伝承に付随するものであった柱の聖母が、17世紀のカランダの奇跡を契機に聖ヤコブ伝承から独立した聖母として注目を集めるようになる。このことが柱の聖母を聖ヤコブ崇敬の後続の崇敬として、また聖ヤコブ崇敬から移行した崇敬として捉えられる根拠になっている。しかしながら17世紀に聖ヤコブあるいは柱の聖母に関して著わされた書を見ると、聖ヤコブと柱の聖母は相補的な関係で

あったことが窺える。柱の聖母についてはムリーリョ、アグレダ、アマダの書があり、聖ヤコブを主題としたものにカステジャの書があるが、特にアマダとカステジャの書は、前述の論争に対して布教の正当性を立証することを主眼としていた。よって柱の聖母崇敬を聖ヤコブ崇敬と入れ替わるものとして捉えるのではなく、両聖人が習合した崇敬へと変化していったものとして解釈できる。同様のことは巡礼についても言える。

近世ではサンティアゴ巡礼路として、ピレネー山脈を越えるフランス人の道よりもカタルーニャの道が主に使用されていた。小氷期は寒冷化によってピレネー山脈で氷河の前進が起こっていた。よって中世とは異なる道を使いサンティアゴ巡礼が行われていたと考えられる。この道の要所となっているのがサラゴサであり、柱の聖母の聖地である。近世は中世のようなコンポステーラやエルサレムに向かう遠距離巡礼よりも、近くの聖母へ巡礼を行う近距離巡礼が主に行われていたとされる。だがサラゴサを訪れた巡礼者の多くは外国からであり、特にイタリアからの巡礼者が多かったとウビエトは指摘している。巡礼者がサラゴサを訪れた理由は、当時興隆した柱の聖母の加護を求めためであるが、巡礼者の6割はコンポステーラへの往路か復路にサラゴサを訪れているため、サラゴサを最終目的地として位置づけていなかったと解釈できる。つまりサンティアゴ巡礼者として、中世と同様にコンポステーラまでの遠距離巡礼を行っていたことになる。イタリアでは巡礼者聖ヤコブやマタモロスの図像は、対抗宗教改革における規制の対象となった。しかし巡礼者聖ヤコブは、その後も柱の聖母と一緒に図像に用いられ、当時、数多く制作されていた使徒聖ヤコブの図像と同様に広く流布した。人々は柱の聖母に病氣治癒以外にも旱魃、洪水による家屋の破損、蝗害に対する加護を願った。旱魃や洪水などにはそれぞれに執り成しの聖人がいるにもかかわらず、「天候回復」に効験のある柱の聖母に執り成しを求めている。そして往復路で訪れたコンポステーラでは、聖ヤコブに、災害、ペスト、旱魃などに際して加護を受けたことに感謝した。特にペストのパンデミック後にはサンティアゴ巡礼者の数がローマ巡礼者よりも増えており、その理由として巡礼者の多くがペストからの救済に対する奉納物を納めにいったことが考えられる。つまり聖ヤコブには、天候異常によって発生するペストからの加護、すなわち「病氣治癒」を嘆願していたと推測できる。

聖ヤコブと柱の聖母の図像は17世紀にコンポステーラでもサラゴサでも取り入れられた。これは聖ヤコブ崇敬と柱の聖母崇敬が結びつくことによって、近世の民衆に最も求められていた「病氣治癒」と「天候回復」の加護が得られることにある。16世紀の宗教改革の影響によって一度は減少傾向を見せたサンティアゴ巡礼が、17世紀に再び関心を呼び、サンティアゴ巡礼の揺り戻しが起こったとされるその理由として両聖人の結びつきがあったと考えられる。ペストに対して万能な治癒力を持つ聖ヤコブへの崇敬、聖ヤコブの聖遺物的存在である大聖堂、柱の聖母と伝承上の繋がりを持つサンティアゴ巡礼、この3つが結びついたものが近世における聖ヤコブへの信心であった。近世のサンティアゴ巡礼とは、「病氣治癒」「天候回復」の両聖人の加護を求める巡礼の旅であったと考えられる。

以上のように、自然災害や病についての原因が特定できず神罰として解釈されていた時代、聖ヤコブは中世初期の気候最悪期の終盤では「病氣治癒」と「悪魔祓い」に効験のある聖人として讃えられた。その後中世中期の温暖期になり天候が安定すると、「病氣治癒」以外の効験が高まり、合戦中の加護、また巡礼中の加護が重視されて「危難回避」の聖人としての役割も付加された。やがて近世に入り、小氷期の異常気象や寒冷が最も顕著に現れた17世紀になると、柱の聖母と習合することにより「病氣治癒」と「天候回復」の加護が両聖人に見出された。このように聖ヤコブは民

衆の心の拠り所として、各時代によって求められる効験やその崇敬の在り方を少しずつ変化させながら、癒しの奇跡をもたらしてきた聖人であったと考えられる。